

『私の戦後 70 年談話』

2015 年 08 月 24 日

私は 1941 年に旧満州の大連で生まれた。戦時中の記憶はほんの少ししかない。花電車が通ると、かくれんぼをしても、飛び出して見たこと、海水浴に行き、浮袋に掴まって泳いだことなどである。1945 年、父は 44 歳であったが、召集令状が来た。その 3 日後に敗戦になり、帰宅したと聞いた。幸いであったと思う。4 歳 4 ヶ月の時が敗戦だった。その日の記憶は全くない。戦後の記憶は多少ある。食べ物はコウリヤンばかりで、白米飯を食べた記憶はない。そして、トウモロコシの粉をこね、蒸したパンを食べた。日本人の学校と中国人の学校がチェンジされ、幼児がいると引き揚げの準備ができないからと兄たちと一緒に中国人の学校に通った。幼稚園ではなかった。汚い校舎であった。帰国のため、家財道具を道に並べて売った。港へトラックの荷台に乗せられ、運ばれた。両脇にいるソ連兵から持ち物を調べられ、高価な物は全て没収された。帰国船は貨物汽船であった。仕切りはなく、大勢の家族が船底で雑居していた。機雷があるので、航行できないと何日も停泊していた。しかし、銃撃を受けたことはなかった。両親の苦労は察するが、命の危険を感じたことはなかった。海上から佐世保はきれいに見えた。1947 年 2 月であった。上陸した時「男は残れ」と号令がかかった。私が残っていると、母と兄姉たちは行ってしまった。私に気がつき、母が「たかおちゃん、来なさい」と言うので「男は残れと言ったよ」と答えたことを覚えている。九州では男は家長を指すことを知った。汽車で、父の故郷の駅に着いた時、親戚の人が白米のおにぎりを持って来ていた。そのおにぎりは私が今まで食べたものの中で一番美味しかった。忘れ得ない味である。引き揚げ後は、絵に描いたような貧しさであった。戦後は「空腹」の記憶で、思想的な問題は成人してからであった。

岩波書店が、41 名の著名人からの寄稿を求め『私の戦後 70 年談話』を出版している。戦時中、成人していた人は少なく、小学生から二十歳までの人が多い。敗戦による価値観の転換に戸惑い、大人への不信感に苦しみながら、平和を求め続けた人々の談話である。

『ボクラ少国民』『子どもたちの太平洋戦争』などの著作を読んだことのある、1931 年生まれのノンフィクション作家中山恒氏が「悪夢が再来するとき」と題して書いている。「玉音放送」を聞いたが、受信状態が悪く聞き取れず、大日本帝国が連合軍に降伏したなど夢にも思わなかった。徹底してすり込まれた国体原理主義にどっぷり浸っていたからである。国民は良く忠孝に励み天皇に尽くしてきた国の姿が、世界に卓越した美しいものであるという国の教えを信じて疑わなかった。大日本帝国憲法の第一条は「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」で、第三条は「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」であった。極右の国体原理主義者らが国体明徴運動を惹起し、呼応した文部省は学校現場に天皇を「現人神」として神格視することを徹底させた。『国体の本義』を各学校に配布し、日本人は生まれながらにして天皇に忠誠を尽くすように運命づけられていると説き「私たちの生命は、元々陛下のものであるから、一旦緩急あれば（戦争になったら）否応なしに陛下にお返し申し上げなくてはならない」と教え込まれた。「朕力忠良の臣民（少国民）」であることを疑わなかった。この呪縛から解き放たれたのはマッカーサーの横にサーバントみたいにちよこんと立っているモーニング姿の天皇の映像であったという。「この国体原理主義の象徴が靖国神社だった。国の指導者を自任するむきが靖国参拝をあえて強行するとき、『秘密保護法』を押しつけ、日本国憲法九条を無視して軍事力の行使を企むとき、私たちは、あの悪夢の再来におびえるのである」と結んでいる。主権は国民にあることを真に勝ち取る時、日本ははじめて民主主義の国になれる。